# 看護科学生が抱く老人のイメージ

川崎医療短期大学　第一看護科

太湯　好子　　酒井　恒美　　杉田　明子　　初鹿真由美

（平成３年８月26日受理）

# Image of the Aged Held by Student Nurses

Yoshiko FUTOYU, Tsunemi SAKAI,
Akiko SUGITA and Mayumi HATSUSHIKA

*Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions*
*Kurashiki, Okayama 701-01, Japan*
*(Received on Aug. 26, 1991)*

**Key words**：老人，イメージ，看護科学生

## 概　　要

看護科学生の老人に対する否定的イメージを把握し，またそれらのイメージに関与する要因を明らかにするために，アンケート調査を行った。

老人の否定的イメージについての因子分析の結果からは，①嫌悪感，②性格や精神状態に関する否定的イメージ，③行動に関する否定的イメージの３因子が抽出された．この３因子に関与する要因を詳細に分析した結果，過去における老人との触れ合いの体験も影響があるが，現在の老人との触れ合いのいかんの方が影響が大きいということが明らかになった。このことから，老人看護学の教育の中で組み込む体験の質の重大さが示唆された。

## Ⅰ．はじめに

1990年の４月から新しいカリキュラムが実施され，従来の成人看護学より老人看護学が新たに独立した。本学においては，1988年の４月よりすでに特講として老人看護学の講義と，老人看護実習を病院と老人ホームを使用し，実施に移してきた。だが，現在もなお試行錯誤の中で講義や実習内容の検討をしている段階である。そして，これらの講義や実習を通して，学生の抱く老人像が実習成果や看護の質に影響を与えることに気づかされてきた。

過去の報告[1)~8)]をみても学生の抱く老人像には，生活体験や学習体験が関与しているとある。近年の若者は老人との同居体験をもつ者が少なく，老人と接する機会の乏しい者が多い。そして，このような限られたごく少ない体験の中から老人像を作りあげている実情がある。

看護教育に携わる我々としては，学生の抱く老人像を知り，学生の老人理解の度合に合わせて教育の手だてを工夫することが必要であり，そうすることによって学生が老人やその家族に誤まった先入観をもつことなく，私見を交えずに相手に添ったはたらきかけができるのではと考えている。

このような考えに立ち，看護科学生の老人に対する否定的イメージを把握し，またそれらのイメージに関与する要因を明らかにするために，Ｋ短期大学の看護科学生を対象として調査を実施したので報告する。

## Ⅱ．方　　法

### １．対　象　者

Ｋ短大看護科１～３年の全員168名を対象とした。回収数(％)は一次調査：155名(92.3％)，二次調査：151名（89.9％）であった。

2．一次調査

岡山市による高齢者社会・高齢者福祉に関する市民意識実態調査[9]において取り上げられた老人に対するイメージの10項目（表1）について，①A，②Aに近い，③どちらともいえない，④Bに近い，⑤Bの5段階評定による回答を求めた。

調査時期は1988年7月である。

3．二次調査

老人に対する否定的イメージとして，表3に示した20項目（守屋[10]によるものを改変した）を取り上げ，①そう思う，②どちらかというとそう思う，③そうは思わないの3段階評定による回答を求め，それぞれの回答に2，1，0の得点を配した。したがって，得点が高いほど否定的イメージが強いことを示す。

また，老人に対する否定的イメージに影響を及ぼすと考えられる要因として表2に示した要因アイテムとカテゴリーを取り上げ，回答を求めた。

調査時期は1988年9月である。

4．統計学的解析

平均値の差の検定にはt検定を，比率の差の検定にはフィッシャーの直接確率計算法を用いた。

因子分析には，主因子法（ヤコビ法）・バリマックス回転法[11]を，因子得点の算出には真の因子得点の最小二乗的推定値による方法を用いた。抽出因子数は，固有値が1.0以上を基準にして決定した。

要因の影響の追求には数量化理論第1類[12]を適用した。

**表1　一次調査において取り上げた老人に対するイメージ**

| | A（肯定的イメージ） | B（否定的イメージ） |
|---|---|---|
| ① | 尊敬できる | 尊敬できない |
| ② | 親しみやすい | 親しみにくい |
| ③ | 忍耐力がある | 忍耐力がない |
| ④ | 積極的 | 消極的 |
| ⑤ | 自立心が強い | 依存心が強い |
| ⑥ | 明るい | 暗い |
| ⑦ | 自尊心が強い | 自尊心が弱い |
| ⑧ | 楽しそうな | つまらなそうな |
| ⑨ | 協調性がある | 協調性がない |
| ⑩ | 柔軟性がある | 頑固な |

## Ⅲ．成　　績

1．一次調査

10項目の質問にBまたはBに近いと否定的イメージを回答した者の率を，岡山市[9]による一般市民（岡山市民，1775名）でのそれと比較してみると図1のようになり，全項目にわたって学生の方が否定的イメージが強く，②親しみにくい，④消極的，⑤依存心が強い，⑥暗い，⑦自尊心が弱い，⑧つまらなそうな，⑨協調性がないで有意の差を認めた。その中でも，20%以上の学生が否定的イメージとしてとらえている項目は，④，⑤，⑥，⑧，⑨，⑩であり，⑩頑固とするイメージは半数以上の学生が抱いていた。

2．二次調査

1）看護科学生の老人に対する否定的イメージ

20項目のすべてに回答のあった143名のデータについて，質問別に集計した成績が表3である。強い否定的イメージをもっている者の率の最も高い項目は，Q8頑固（33.6%）で，次いでQ5考え方が主観的，Q3不安感をもっている，Q14感情的であった。逆に，Q19憎らしい存在，Q20役に立たない，Q17冷たい感じ，Q11物事に飽きやすい，Q12やることが粗雑，Q15思慮

**表2　要因アイテムとカテゴリー**

| 要因アイテム | カテゴリー |
|---|---|
| Y1：兄弟（姉妹）関係 | C1：一人っ子，2人以上の兄弟（姉妹）の末っ子<br>C2：2人以上の兄弟（姉妹）の長子<br>C3：その他 |
| Y2：主として住んだ（育った）所 | C1：田舎<br>C2：街<br>C3：都市 |
| Y3：老人と同居した経験 | C1：ある<br>C2：ない |
| Y4：老人にかわいがられた経験 | C1：ある<br>C2：ない |
| Y5：祖父母との関係 | C1：うまくいっている<br>C2：うまくいっているとはいえない<br>C3：祖父母はいない |
| Y6：学年 | C1：1年<br>C2：2年<br>C3：3年 |

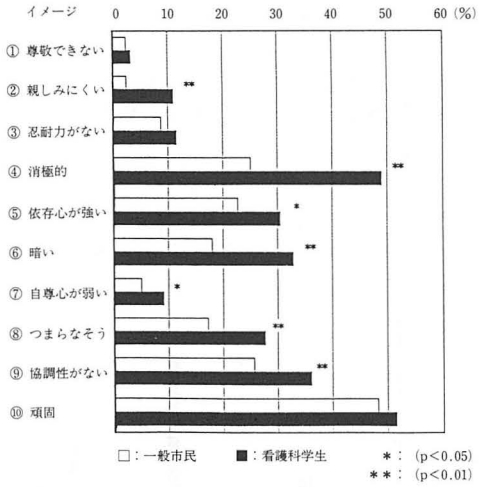



**図1　看護科学生と一般市民での老人に対する否定的イメージの回答率**

**表3　質問別にみた老人に対する否定的イメージ**

| 質　　問 | そう思う | どちらかというとそう思う | そうは思わない |
|---|---|---|---|
| Q 1：精神状態が不安定 | 10( 7.0) | 56(39.2) | 77(53.8) |
| Q 2：物事に敏感 | 28(19.6) | 40(28.0) | 75(52.4) |
| Q 3：不安感をもっている | 36(25.2) | 60(42.0) | 47(32.9) |
| Q 4：劣等感をもっている | 13( 9.1) | 48(33.6) | 82(57.3) |
| Q 5：考え方が主観的 | 39(27.3) | 55(38.5) | 49(34.3) |
| Q 6：性格が攻撃的 | 7( 4.9) | 18(12.6) | 118(82.5) |
| Q 7：依存的 | 27(18.9) | 52(36.4) | 64(44.8) |
| Q 8：頑固 | 48(33.6) | 62(43.4) | 33(23.1) |
| Q 9：消極的 | 15(10.5) | 51(35.7) | 77(53.8) |
| Q10：行動が不活発 | 21(14.7) | 62(43.4) | 60(42.0) |
| Q11：物事に飽きやすい | 2( 1.4) | 19(13.3) | 122(85.3) |
| Q12：やることが粗雑 | 4( 2.8) | 19(13.3) | 120(83.9) |
| Q13：やることが遅い | 26(18.2) | 53(37.1) | 64(44.8) |
| Q14：感情的 | 30(21.0) | 56(39.2) | 57(39.9) |
| Q15：思慮が浅い | 5( 3.5) | 19(13.3) | 119(83.2) |
| Q16：暗い感じがする | 6( 4.2) | 41(28.7) | 96(67.1) |
| Q17：冷たい感じがする | 0 | 11( 7.7) | 132(92.3) |
| Q18：不潔な感じがする | 4( 2.8) | 39(27.3) | 100(69.9) |
| Q19：憎らしい存在だ | 2( 1.4) | 4( 2.8) | 137(95.8) |
| Q20：役に立たない | 0 | 8( 5.6) | 135(94.4) |

注　人数（%）を示す.

が浅い，Q 6性格が攻撃的などの否定的イメージをもつ者は20%未満であった。

次に，20項目の老人に対する否定的イメージについての回答を因子分析した結果，3因子が抽出された。各因子に最も高い因子負荷量を示し，その値が0.4以上の質問は表4のようである。第1因子は学生が抱く老人に対する嫌悪感，第

**表4　老人に対する否定的イメージについての各質問の因子負荷量**

| 因　子 | 質　　問 | 因子負荷量 | 固有値 | 累積寄与率(%) |
|---|---|---|---|---|
| 第1因子：嫌悪感 | Q 6：性格が攻撃的 | 0.43 | 2.92 | 14.60 |
| | Q12：やることが粗雑 | 0.60 | | |
| | Q15：思慮が浅い | 0.63 | | |
| | Q17：冷たい感じがする | 0.57 | | |
| | Q18：不潔な感じがする | 0.53 | | |
| | Q19：憎らしい存在だ | 0.73 | | |
| | Q20：役に立たない | 0.48 | | |
| 第2因子：性格や精神状態に関する否定的イメージ | Q 1：精神状態が不安定 | 0.56 | 2.37 | 26.43 |
| | Q 3：不安感をもっている | 0.54 | | |
| | Q 5：考え方が主観的 | 0.54 | | |
| | Q 7：依存的 | 0.43 | | |
| | Q 8：頑固 | 0.44 | | |
| | Q14：感情的 | 0.50 | | |
| 第3因子：行動に関する否定的イメージ | Q 4：劣等感をもっている | 0.49 | 1.82 | 35.51 |
| | Q 9：消極的 | 0.54 | | |
| | Q10：行動が不活発 | 0.56 | | |
| | Q13：やることが遅い | 0.41 | | |
| | Q16：暗い感じがする | 0.46 | | |

**表5　老人に対する否定的イメージの因子別平均回答得点**

| 因　　子 | 平均値±標準偏差 | t 検定* |
|---|---|---|
| 第1因子：嫌悪感 | 0.16±0.28 | c |
| 第2因子：性格や精神状態に関する否定的イメージ | 0.84±0.49 | a |
| 第3因子：行動に関する否定的イメージ | 0.58±0.45 | b |

注　得点が高いほど否定的イメージが強い.*：異なったアルファベットを付した群間に有意の差を認める（p<0.05）.

2因子は老人の性格や精神状態に関する否定的イメージ，第3因子は老人の行動に関する否定的イメージと解釈した。

抽出された3種類のイメージの否定の度合いを比較するために，それぞれの因子に最も高い因子負荷量を示した質問の得点を平均し，それをイメージ別回答得点として，全被験者での平均値および標準偏差を求めた結果は表5のようである。最も強い否定的イメージは老人の性格や精神状態に関するイメージにみられ，次いで老人の行動に関するイメージ，老人に対する嫌悪感の順に否定の度合いが低い。それぞれの否定の度合いの間には有意の差が認められた。

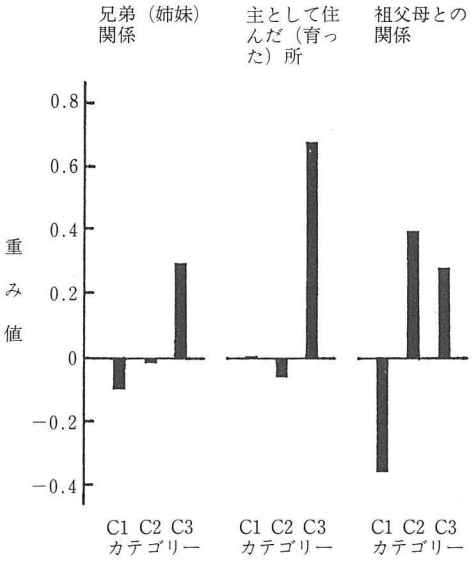
2）老人に対する否定的イメージに及ぼす諸種要因の影響

老人に対する否定的イメージとして取り上げ

た20項目のすべてに回答のあった学生のうち，要因として取り上げた６アイテムのすべてに回答のあった131名のデータを検討の対象とし，因子分析によって求めた３因子の因子得点のそれぞれを外的基準として，数量化理論第１類による解析を行った。偏相関係数が比較的大きい値（0.1以上）を示した要因アイテムについて，カテゴリー別の重み値を図示したものが図２～４である。重み値が＋のカテゴリーは，その絶対値が大きいほどイメージを否定的に引っ張り，－のカテゴリーはその逆にイメージを肯定的に引っ張ることを示す。なお，重相関係数は第１因子得点：0.384，第２因子得点：0.451，第３因子得点：0.300であった。

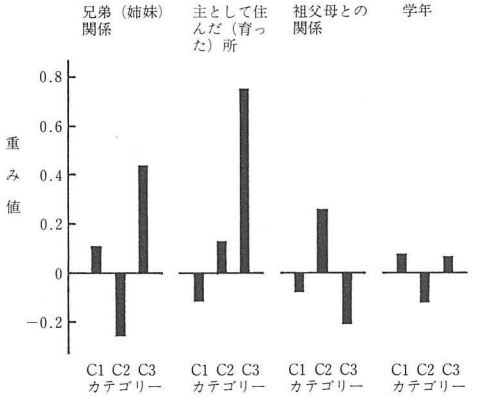
第１因子得点，すなわち老人に対する嫌悪感にはＹ１，Ｙ２，Ｙ５，Ｙ６が影響を及ぼし，Ｙ３，Ｙ４はかかわりをもっていなかった。Ｙ１，すなわち兄弟（姉妹）関係では，Ｃ２：長子の否定的イメージが最も弱く，Ｃ3：長子，一人っ子，末っ子以外の者が最も強い否定的イメージをもっているといえる。Ｙ２，すなわち居住地区による違いよりみると，Ｃ３：都市部の者の否定的イメージが最も強いことがわかった。Ｙ５，すなわち祖父母との関係では，Ｃ２：うまくいっているとはいえない者の否定的イメージが最も強かった。また，Ｙ６の学年別ではＣ２：２年生が最も否定的イメージが弱い。

第２因子得点，すなわち老人の性格や精神状態に関する否定的イメージには，Ｙ６を除いては老人に対する嫌悪感と同様，Ｙ１，Ｙ２，Ｙ５が影響を及ぼし，Ｙ３，Ｙ４，Ｙ６はかかわ



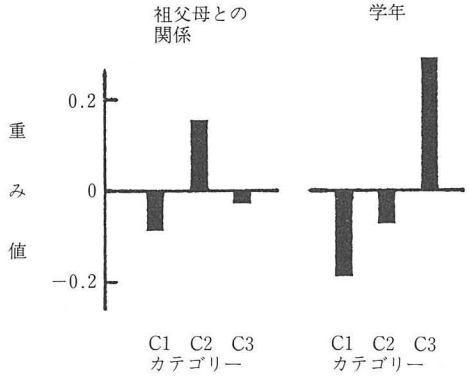

注 図２に同じ．

**図３　第２因子：性格や精神状態に関する否定的イメージに及ぼす各種要因の影響**




注 カテゴリーは表２参照，重み値が＋のカテゴリーは，その絶対値が大きいほどイメージを否定的に引っ張り，－のカテゴリーはその逆にイメージを肯定的に引っ張ることを示す．

**図２　第１因子：嫌悪感に関する否定的イメージに及ぼす各種要因の影響**




注 図２に同じ．

**図４　第３因子：行動に関する否定的イメージに及ぼす各種要因の影響**

りをもっていなかった。すなわち，兄弟(姉妹)関係ではＣ３：長子，一人っ子，末っ子以外の者の否定的イメージが最も強く，居住地区でも，Ｃ３：都市部の者の否定的イメージが強い。また，祖父母との関係においても，Ｃ２：うまくいっているとはいえない者の否定的イメージが最も強く，Ｃ３：祖父母のいない者が次いで強い否定的イメージをもっているといえる。

第３因子得点，すなわち老人の行動に関する否定的イメージには，Ｙ５，Ｙ６が影響を及ぼし，Ｙ１，Ｙ２，Ｙ３，Ｙ４はかかわりをもっていない。Ｙ５の祖父母との関係では，Ｃ２：うまくいっているとはいえない者の否定的イメージが嫌悪感，性格や精神状態に関する否定的イメージと同様に最も強く，学年別では上級学年ほど否定的イメージが強いことがわかった。

## Ⅳ．考　　察

Ｋ短大の看護科学生の老人との同居率をみると，24.1％と全体の¼にみたない。

近年，学生達をとりまく社会環境は老年人口の増加とは逆に，核家族化は進み，老人と接する機会は減少傾向にあり，都市化の波の中で農村部でさえ，隣近所との関係が脆弱となり，日常生活の中で老人と接する機会が狭められている実状にある。

ナースを志す学生達も，これらの社会環境の中で育った若者である。現代の若者，特にナースを志す学生の老人観については，すでにいくつかの報告[1)~8)]がある。しかし，一般市民と対比し，またその個人差を左右する要因について多変量解析を適用し，追求した成績はほとんどみられないように思われる。

Ｋ短大の看護科学生の老人に対するイメージを，一般市民との比較でみると，否定的イメージが強いことがわかった。このことは，若者が老人は自分とは別の世界の人で，自分の延長線上として考えられないことも関連があるように思える。島田[13)]は，老人の特性や生理を知識として述べても，老人が自分の人生の延長線上にあり，別種族ではない身近な存在として理解されなければ，看護は展開できないと述べている。この考えに筆者らも同感であり，老人看護を教育するときの課題であろうとも思う。

学生が抱いている多くの否定的イメージを因子分析によって要約すると，３因子が抽出された。それらよりみると，最も強く抱いている否定的イメージは，“老人の性格･精神状態に関するイメージ”であり，次いで“老人の行動に関するイメージ”，“嫌悪感”の順である。学生が最も強く抱いている老人の性格・精神状態に関する否定的イメージに寄与している要因をみると，兄弟関係では長子以外＞長子で，成育環境では都市＞田舎となり，祖父母との関係の良否では否＞良となり，老人との過去の触れ合いの良否が関与していることがうかがえる。そして，この傾向は嫌悪感を左右する要因に関しても同様であり，老人の性格・精神状態に次いで強い老人の行動に関する否定的イメージにも，やはり祖父母との関係の良否がかなり影響している。さらに，学年によっても差があり，教育による影響，すなわち老人看護学の講義や実習の組み立てによる変化がうかがえる。２年次は老人看護学の講義をうけた直後の調査であり，３年次は実際に老人の看護を体験してみて，老人の行動面の援助の難しさを実感した結果とはいえないだろうか。このことは，嫌悪感に関しても同様のことがいえそうである。だが，老人との同居経験や老人からかわいがられた経験がいずれの否定的イメージにも寄与していなかった結果は予想に反するものであった。なお，学生の老人に対する否定的イメージの個人差は，重相関係数からみて，取り上げた要因のみでは説明し得ない部分がまだかなりあるように思われる。今後の追求にまちたい。

以上のことから，老人に対して抱く否定的イメージは，過去の老人との触れ合いの体験も影響はあるが，現在の老人とのかかわり方，たとえば居住地区の中での老人の存在や，家族の中での老人のとらえ方や，実習などの学習体験からくる影響の方が大きいのではと考える。また，老人の行動に関する否定的イメージは，その他の否定的イメージに比べ，接する老人の特徴(たとえば病者か，健康な老人かなど）に影響されるのではないかとも考える。

## Ⅴ．結　　論

Ｋ短期大学看護科学生の老人に対する否定的

イメージと，その個人差に寄与する要因を追求し，以下の結果を得た。

1．老人に対する一般的な否定的イメージは，一般市民より学生の方が強いことがみられた。

2．因子分析によって，老人に対する否定的イメージは，①嫌悪感，②性格や精神状態に関する否定的イメージ，③行動に関する否定的イメージに要約された。

3．因子別の学生の老人に関する否定的イメージの強さは，①性格や精神状態に関する否定的イメージ＞②老人の行動に関する否定的イメージ＞③嫌悪感の順であった。

4．老人に対する否定的イメージと兄弟（姉妹）関係では，長子＜末っ子＜その他で，居住地区では，田舎＜都市で，嫌悪感および性格・精神状態に関する否定的イメージが強かった。

5．祖父母との関係は，いずれの否定的イメージにも強く寄与しており，うまくいっている者で低かった。

6．行動に関する否定的イメージは，上級学年になるほど高かった。

7．老人との同居経験や老人からかわいがられた経験は，いずれの否定的イメージにも寄与していなかった。

## 謝　　辞

終りに，本調査にご協力いただいた皆さまに心から深謝いたします。

## 文　　献

1）山田ヒロ子，飯田澄美子：看護学生のとらえた老人像，第14回日本看護学会集録（看護教育），122—127，（1983）

2）松岡　緑，西田真寿美，関　文彦：因子分析による看護学生の老人像に関する研究，九州大学医療技術短大紀要，**8**，35—43，（1981）

3）大山瑞穂，馬場昌子，水田チヨ子：特別養護老人ホーム実習前後における看護学生の老人像，愛知県立看護短大誌，**19**，55—62，（1987）

4）川島和代，真田弘美，前川弘美，金川克子：老人看護学実習前後の看護学生の老人に対するイメージ，第19回日本看護学会集録（看護教育），273—275，（1988）

5）貝塚ミドリ，清水光子，貝森紀子：老人看護学の位置づけを考える，第11回日本看護学会集録（看護教育），32—35，（1980）

6）鳴海喜代子，他：看護学生の老人観に関する研究　第1報，千葉大学看護学部紀要，**7**，1—9，（1985）

7）鳴海喜代子，他：看護学生の老人観に関する研究　第2報，千葉大学看護学部紀要，**8**，11—17，（1986）

8）鳴海喜代子，他：看護学生の老人観に関する研究　第3報，千葉大学看護学部紀要，**10**，13—21，（1988）

9）岡山市：高齢化社会・高齢者福祉に関する市民意識実態調査報告書，（1986）

10）守屋国光：老人の心理，各論（I）正常心理，老人心理へのアプローチ（長谷川和夫，他編），41—43，医学書院，東京，（1987）

11）芝　祐順：因子分析法，東京大学出版会，東京，（1986）

12）古川俊之，田中　博：多変量解析プログラムパッケージ入門，83—101；128—150，医学書院，東京，（1983）

13）島田妙子：老人の価値観，老人の個人差の理解を，看護教育，**25**（2），83，（1984）